

INTERNATIONAL ERIC NEWSLETTER

No.12
JULY 1992
エリック ニュースレター

国際理解教育・資料情報センター International Education Resource & Information Center

特集：違っているから、おもしろい

昨秋の「ERICグローバル・セミナー'91」の目玉の1つは異文化理解教育でした。講師は米国から来日したキャシー・ウィリアムズ氏。このとき紹介された事例を中心に、異文化理解やコミュニケーションの資質を高める具体的な手法を特集してお届けいたします。

事例1：

外国語を話す犬？

ねらい：・外国語の発音をまねる。

- ・動物の鳴き声の外国語での表現を知る。
- ・音に対する異文化間の認識の仕方を比較し、認識の多様性に気づく。

準備するもの：プリント

展開：

- 1 動物の「言語」を考える。「犬はどんな吠え方をするかな？」グループごとに、または全体で、吠え方を思いつくかぎりあげる。擬音語の表現でも、言葉で説明するのもよい（例：ワンワン、キャンキャン、遠吠え、唸るなど）。出たものをすべて板書する。
- 2 「隣同士で一人ずつ犬の鳴き真似をしてみよう。本物の犬のように聞えるかどうか、もう片方の人は注意して聞いてください」（本当の犬の鳴き声をテープに

録音しておき、比較するために聞いてもよい。）

「みんなの鳴き声は本物の犬とそっくりだったかな？
それはなぜだろう？」

- 3 プリント「外国語を話す犬？」を配り、各自またはグループで取り組む。

*対象に応じて、クイズにしても、課題として調べて来るよう言ってもよい（各国の大使館や観光局、あるいは地域の在日外国人に尋ねるなど）。調べる方法をクラスで話し合ってもよい。

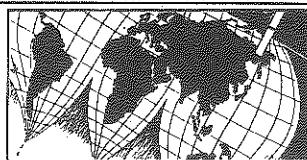
- 4 プリントが完成したら、全体で次の点を話し合う。
 - ・どの言語の発音が犬の鳴き声にいちばん近いか。
 - ・全員が1つの答に同意するか。異なる意見はないか。

*「鳴き声コンテスト」で、一番本物に近い犬を投票で選んでもよい。

・犬の鳴き声は違わないにもかかわらず、言語や聞く人によって鳴き真似が違うのはなぜか話し合う。

目次

<特集> 違っているから、おもしろい	
事例1：外国語を話す犬？	1
事例2：あなたが描く世界像は？	2
事例3：君はしっかり見ているか？	4
事例4：隠れている正方形（実践報告）	5
事例5：数字でヨーイドン	6
事例6：自分発見!!	7
事例7：未知との遭遇!?	8
メディアを使った異文化理解	8
事例8：話のない会話!?	9
アメリカ異文化コミュニケーション研修参加報告記	10
情報コーナー	12



例) 人間が耳で聞いて真似をするのだから、聞き方や真似の仕方が違えば、本物の犬の鳴き声と違ってくる。人によって、犬の声の表現の仕方が違う。国や文化によっても違う。

応用:

- 1 外国語学習の際、日本語の発音と比較してどちらか一方にしかない音を調べて「聞き取り」や「発音」の練習に発展させるなど。
- 2 外国人留学生を招いて、母国との文化の認識の違いや、そのため生じた誤解の体験などを話してもらう。

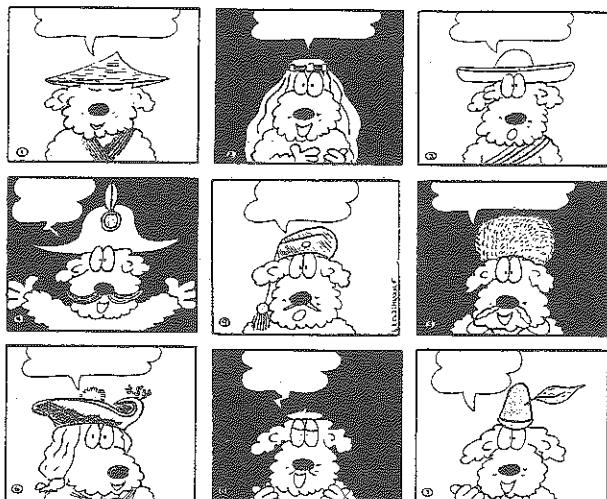
【現場から一言】柴田先生 小学校2年

認識や表現の多様性に気づかせる教材としておもしろい。やり方を多少変えれば、小学校中学年ぐらいから幅広い年齢に応用できるのではないか。国による違いだけでなく、同じ日本人どうしでも発音や表現の仕方に違いがある点から、外国人に限らず人はみな様々だというように拡大することもできるのでは？（談）

プリント「外国語を話す犬？」

吹き出しに適当な鳴き声を入れなさい。

- ①日本語 ②アラビア語 ③スペイン語 ④イタリア語
- ⑤ロシア語 ⑥英語 ⑦ドイツ語 ⑧フランス語
- ⑨ギリシャ語



答え: ①ワンワン ②ハウハウ ③ハウハウ ④バウバウ
 ⑤ガウガウ ⑥バウワウ ⑦ヴァウヴァウ ⑧ウアウア
 ⑨ガブガブ 参照: 韓国語モンモン タイ語ホンホン

事例2:

あなたが描く世界像は？

ねらい: • 世界地図の様々な図法に慣れる。

- 自国中心的な考え方が世界地図に表われていることに気づく。
- 地図を通して自分の世界観を省み、個人や文化による世界観の違いに気づく。

時間: 1時間

準備するもの: プリント、メルカトル図法の白地図（人数分）

展開:

- 1 プリントを各自に配る。
 「この3枚の地図は、よく見る地図とはどこが違いますか」（図法の違い、中心の違いなど）
- 2 「今から国名を言います。3枚の地図のうちどれか1枚でその国の場所を探して、国名をその位置に書き込みます。3枚全部に書き込む必要はありません。いちばん早く簡単に見つかりそうな地図に書いてください」（日常見慣れた地図帳の地図を選ぶだろう）
 下の国名を読み上げる（あまり時間をかけない）。
 「書けなければ書かなくてもいいよ」

韓国・スペイン・アメリカ合衆国・インド・ナイジェリア・ニュージーランド・ブラジル・エジプト・フランス・中国・日本・メキシコ・イタリア（年齢などに応じて、国名を追加したり入れ替えたりする。プリントにして配ってもよい。）

- 3 全体用の大きな世界地図を使って、正誤を確かめる。（全員で、3枚全部を使って検討してみると、見慣れた地図が使いやすいことがよくわかる。）次のような点について考える。

- 3枚の地図の似ている点・異なる点は何か。
- 自分が一番使いやすい地図はどれか。それはなぜか。
- 上の答えは全員に共通か。それはなぜか。
- 地球を表わすのに最適な地図と言えるのはどれか。それはなぜか。（例 どれが一番とは言えない。よく利用される地図が違えば、使いやすい地図も違う。）



応用：

何も参照しないで、各自で世界地図を描いてもらう（教室に貼ってある世界地図ははずしておく）。大陸の関係を表わせばよく、細かい海岸線や国境は描かなくてよい点を伝える。ヒントとして黒板に大陸名を書いてもいい。できたら、クラスで比較して次のような点を考える。

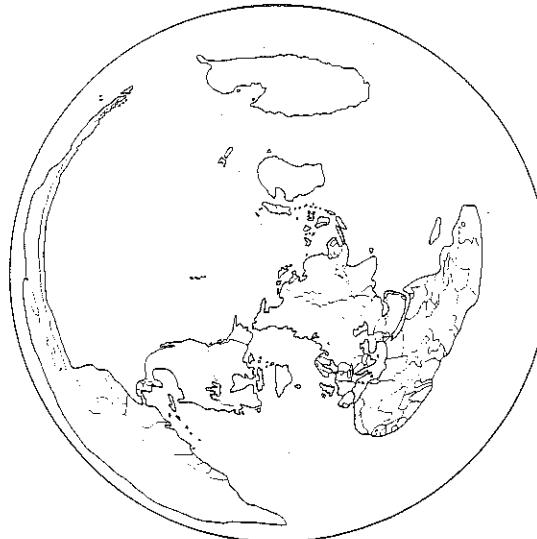
- ・どの程度正確に描けたか。
- ・どの地域を地図の中心に描いたか。
- ・地域によって正確に描けたところと、不正確だったところがあるのではないか。それはどんな地域か。
- （例　自分の国や周辺諸国、自分が関心をもっている地域は正確に描けた。）
- ・それはなぜか（なぜ関心があるか質問してもよい）。

出典：MOVING TOWARD A GLOBAL PERSPECTIVES: SOCIAL STUDIES AND SECOND LANGUAGES, INTERCOM #104, Global Perspectives in Education, NY 1983 p.7-10

【現場から一言】尾立先生 中学英語

中学2年の教科書で、オーストラリアに関連して「逆さの世界地図」が登場する（『NEW CROWN 2』）。これを、他の国に対する興味を高め、普段見慣れない世界地図にふれながら世界の捉え方が国や文化、人によって異なることを理解するきっかけに利用した。①本課に入

プリント（世界地図）

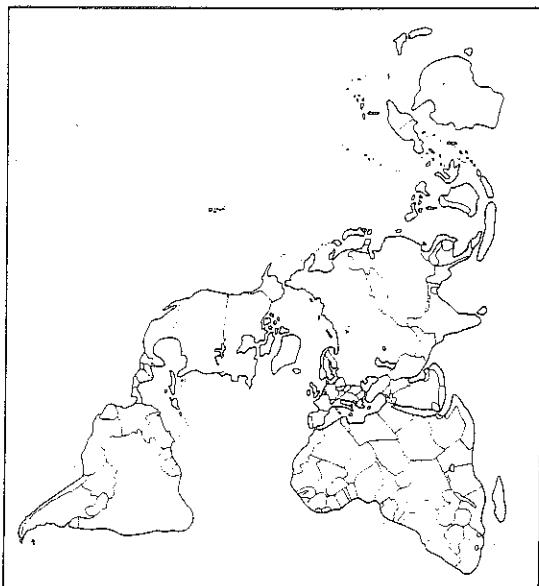


る前に、まずクイズから……英語史に関して、「歴史的に一番古くから英語を話す国は？」、「一番新しい国は？」など。答えの国を地図帳で探す。②数種類の世界地図を比較する（中心の異なるもの、ピーターズ図法など）。南半球と北半球との気候が逆になる点を改めて指摘。③オーストラリアのアボリジニに関する手書きの資料や写真集を準備。写真は、アボリジニの人々が必ずしも伝統的な生活を営み続けているとは限らず、様々な職業に就いている様子がわかるよう、いわゆる「原住民」のイメージから離れたものを特に選んだ。

異文化間の溝(違い)を結ぶ橋

①聴く：相手の話にまず耳を傾ける ②確認する：自分の見方・考え方・感じ方などが相手に合っているかどうか常に気をつける ③尋ねる：自分の伝えたいことを相手が理解しているかどうか相手のフィードバックを求める ④評価は後にのぼす：評価や判断を急がず批判的な対応は避ける ⑤自己を知る：自分の価値観、先入観、コミュニケーションの仕方や人に対する接し方などを自覚する ⑥恐れない：相手を信頼する

INTERCULTURAL COMMUNICATION CONCEPTS AND THE PSYCHOLOGY OF INTERCULTURAL EXPERIENCE, David S. Hoopes



**事例 3 :**

君はしっかり見ているか？ 異文化理解の導入に

ねらい・他人から聞いたことが自分の気持ちや態度にどのような変化を与えるかを考える。

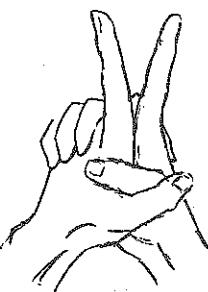
- ・心の中の動きがどのように態度や行動に表われるかに気づく。
- ・多様な視点の中から各自が取捨選択していることを自覚する。
- ・注意してよく観察する姿勢を身につける。
- ・物事を幅広い視野で見ることの大切さに気づく。

時間：10～20分

A 赤い糸

展開：

- 1 両手を組み合わせ、人差し指だけを離して立てる。
- 2 目を閉じて、人差し指どうしが赤い糸で結んであり、糸が次第にきつくなると考える。
- 3 目を開ける。人差し指がついてしまっていないか？
- 4 これはなぜか、ここから何がわかるかを考える。(例 想像したら本当に両指が巻かれる気がした、想像力が現実に強く影響することがある、など。)



B 何がある？

展開：

- 1 「部屋の中を青い物に注意して見回そう」(約30秒)
- 2 「目を閉じて。青い物は何があったかな？」
思いつく順に次々と言ってもらう。
- 3 (目を閉じたままで)「それでは赤はどうだろう？」
- 4 「青と赤とどちらが簡単だった？」(「あお！」という反応が予想される。)
- 5 「なぜ青の方が簡単だったのかな？」

(例 先生が青を見るように言ったから。)

- 6 「言われたことだけを見ていいのかな。歩くとき正面だけ見ていて回りを見ないとどうなる？ 交通事故に遭うでしょう？」

(各自で考えをふくらませる間をとって)

「広い目でみたり、周囲をよく見回したりすることは大切だね。文化に関連させて考えるとどうだろう」

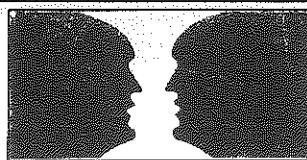
(例 一通りのやり方、見方、考え方だけで満足しているでは、他の可能性に気がつかず、他の人と衝突したり、傷つけたりするかもしれない。)

C 何が見える？

準備するもの：絵(次頁参照、プリントかOHPを利用)

展開：

- 1 全員に絵を見せ、何の絵に見えるか書いてもらう。
 - 2 グループまたはペアで、何に見えたか伝え合う(前に見たことがある生徒には、他の人が意見を交換し終わるまで、待ってもらうとよい)。若い女性と老女のどちらか一方に見えると予想される。
 - 3 <全体で>「何に見えた？ 何歳くらいかな？」
違うものが見えた同士で、絵のどの部分を何と考えると、自分の見方になるかを伝え合う。
 - 4 次のことを話し合う。
 - ・片方しか見えていないと気づいたときの気持ちは？
 - ・目の前にあるものが捉えにくいのはなぜか。
 - ・実生活で似たような体験をしたことはないか。
 - ・異なる環境で、周囲の人のものの見方が自分と全く違うとしたら、どんな気持ちがするか。
 - ・何通りもの見方の中から、各自はどのように選択しているか。文化や固定観念の影響は？ 文化が違うと対応に戸惑うことがあるのはなぜか？ 対応策は？
- *知覚の仕方や感じ方の違いは認識が難しいが、絵を利用すると、違いを即座に体験でき、それを元に他の場合を考えてみることができる。グループ全員が共通体験をもつことで、個々の体験について話し合いを進めやすい雰囲気になる。ある人がどのように情報を取捨選択、評価して、状況に対応しているか、他の人には理解しにくいこともわかる。



[現場から一言] 宇土先生、小学校6年生

「何をどう見るか」は、心の中の状態を映す「鏡」、自分の心の中の動きがそのまま表われるのですね。聞いたことを信じることによって、たとえそれが真実でなくとも、あるいは物事の一面に過ぎなくても、気持ちや意識に変化が生じ、態度や行動に表われる…これは異文化理解における重要な視点を示唆しています。ある事柄に対して、一通りの見方しかできなかつたり先入観があつたりして、それが正しいと思い込んでいると、真実も歪められてしまう。クラスで実践したところ、特にBの事例は子どもたちの反応がとてもよかったです。実際に単純な活動が、「本当にそうだね」と異文化理解に関して深い印象を残したようだ。「こんな簡単な授業（体験学習）をもっとやってみたい！」という声もあったな。（談）

出典：MULTICULTURAL EDUCATION: ACROSS CULTURAL TRAINING APPROACH, Margaret D. Pusch, Intercultural Press, Inc.



事例4：

隠れている正方形〈実践報告〉

報告者 善財利治先生 佐倉市立臼井中学校

（グローバル・セミナー'91のモデル授業でキャシー・ウィリアムズ氏が紹介した事例を実践。）

◇目標 ものごとには多様な見方があることを知る。固定観念や思い込みがあると、真実が見えてこないことを知る。

◇教材 別紙の正方形を1人1枚（次頁）。

◇展開

1 教師が「この紙にはいくつの正方形がありますか」と尋ねる。（生徒の反応：16、18、20など）

2 大きな正方形と小さな正方形があることを知らせる。

3 感想を発表させる。または、書かせる。

（生徒の反応）

- 自分一人で考えるよりも、知恵を出し合うほうが、正解がわかりやすかった。

- 一人で考えるだけではいけない。自分の考え方もみんなで出し合い、大きくものごとを見るようにしたい。

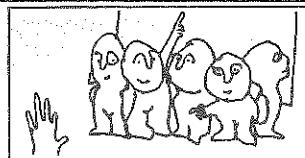
- まわりの人と相談することの大切さがわかった。

◇まとめ

本校の33学級で学級指導の時間で実施。ほとんどのクラスで、楽しくできました。所要時間は5分程度。他の活動と一緒に実施し、導入として行うといいと思います。

生徒の感想には2つのタイプがありました。

「謎解きとしておもしろい」というもの。「協力することが大事だと感じた」「一人ではわからなかったことが考えを出し合うことでわかった」というもの。ねらいを達成できたと思います。但し、3年生のあるクラスで、「正方形はいくつですか」と尋ねた途端に「30！」と正解を叫ぶ子がいて、これで終わってしまいました。3年生は賢いので、たまにはこういうこともあるんですね。また、先に実施したクラスの生徒が友達に教えてしまったため、即座に正解の出たクラスもあります。おもしろい教材なので、友達に「ねえ、こういうの知っている？」と言ってみたくなるようです。



[現場から一言] 宮内先生 小学校1年

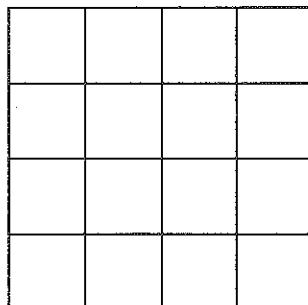
研修会でウィリアムズ先生からいろいろな事例を学び、どのように各教科・領域で取り入れ、カリキュラムに位置づけていくかを考えた。1年生の1学期、算数「20までの数」の单元で事例4と5を応用してやってみた。

> 事例4

(5×5) マスを (3×3) マスにして行った。図形の概念がまだ不充分なので、真四角と長四角の違いだけを教え、「この中に真四角はいくつあるでしょう」と問い合わせた。初め1人で考えさせたところ、答えは「9」と「10」。ほとんどの子が小さな四角だけを数えていたが、「10」と答えた子が一番大きな四角を数えたのだと知ると、みんなハッとしたようで、再び取り組んだ。隣同士で相談すると「12」や「18」の答えまで出てきた。最後に4~5人のグループになると、どのグループからも「14」という答えが出てきた。グループ内では、自分の考えを相手に分かるように伝える、友達の考えにも耳を傾ける、それぞれの答を比べてどれがよいのか相談する、などが行われていた。

見方(数え方)によっていろいろな答えが出てくること(視野を広める)、みんなで力を合わせる(協力する)ことを数えることを通して学んだ。1年生のこの時期の算数は、とかく1問1答になりがちだが、一つの問題(彼らにしてはかなり難問)に30分もかけて諦めずに取り組んだことも、大きな意味があるのではないだろうか。

> 事例5 60までの数字を20までにして行った。



事例5 :

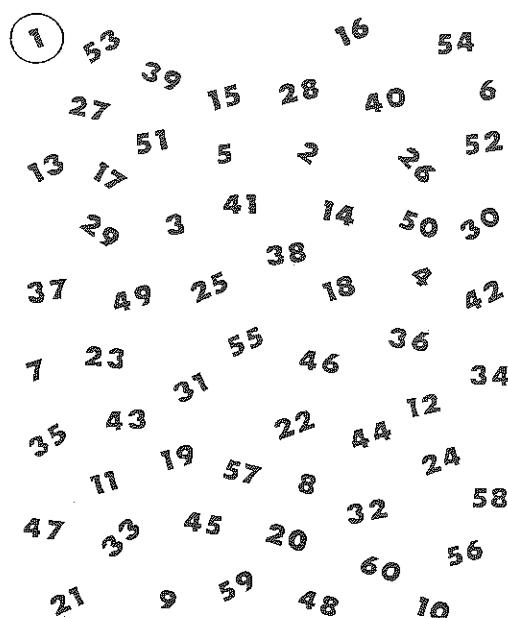
数字でヨイドン

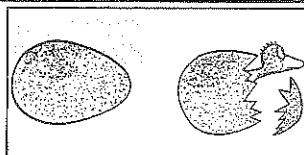
ねらい: 一見無秩序でも法則を発見できる場合に気づく。
準備するもの: プリント(下図)を人数分。

展開:

- 1 プリントを配る。
- 2 <各自で>「数字を1から順に線で結んでいきます。1分間で何番までいくかな?」「スタート!!!」
- 3 (1分後) 「ストップ」「どうだった?」
隣や前後で見せ合う。
- 4 <2人1組で> 上と同じことをする。
- 5 <全体で>「数字の並び方にパターンがあることに気づいた人は?」(答: 左半分に奇数、右半分に偶数)
- 6 「もう一度やってみよう」
- 7 「さっそくと比べてどうだった? 早くできたかな?」
「物事を広い視野で見たり、じっくり観察したりすると、一見、無秩序のように見えることにも、何か秩序のあることがわかります。異なる文化に出会って、わけがわからず、困ったときも、まず落ち着いて観察してください。その文化の法則性が見えてくるはずです」

THE NUMBER GAME



**事例 6 :****自分発見!!**

ねらい：自分を知り、肯定的にうけとめる。

展開：

- 1 各自で、プリント「自分発見」に記入する。
- 2 隣、前後で見せ合う。色をぬって掲示してもよい。

応用：

プリントの項目をカードにして人数分用意し、配る。各自が自分について記入する。グループ（4～6人）に分かれ、グループごとにカードを1つに集める。カードの山から順番に1枚ずつ引いて、書いてあることから誰のカードかをあてる。

○研修参加者から応用について一言

…学級編成時に早く仲間を理解するのに役立ちそう…卒業アルバムに…子育てで自信を失いがちのお母さんたちに、PTAの会合で…授業参観で親子いっしょに…

プリント**自分“発見”**

いちばん自慢できること	いちばんバカをしてかしたこと
びっくりしたこと3つ	いちばん楽しい／幸せなところ(場所)
みんなに覚えておいてほしいと思う自分の特長	自分の将来のゆめ
いちばんいい思い出	直したいと思っている悪いくせ

【現場から一言】宮内先生 小学校1年生

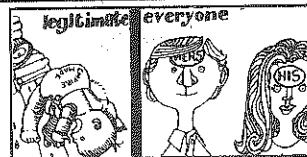
生活科1年の単元「ともだちとあそぼう」で応用した。ひらがなもまだ充分書けない時期なので、自分を紹介するのに、①私の好きなものを絵に描いてみんなに見せる②『おとなになったら〇〇になりたいです』と発表③私の得意なことを発表するとした。子どもたちは、「自分はこんな子です」と相手に伝わったと感じ、安心感、満足感を覚えた。友達と同じこと、違うことを知り、認める場になった。道徳の「自己理解から他者への理解に発展させる」にもつながり、特活でも取り入れられる。

例えば、七夕で、願い事を短冊に書いて発表させるなどはよくあるが、教師の意識でちょっとした助言につながる。例えば、子「願い事かなうかなあ」、教師「いつもそう思ってがんばれば、きっとかなうと思うよ」など。

○八木京子先生（麗澤大学）から

ヒトの知覚力は無意識のうちに文化的規制を受けている。外界から五感に受ける様々な情報を絶えず取捨選択している。この点を自覚するには、次のような活動がよいでしょう。

- a. 絵でコミュニケーション：言葉のかわりに絵で意志疎通を試みる。2人1組で20分間。言葉のもつ重要性、絵に表われる発想の違い、コミュニケーション力（絵画能力以外の資質）などに気づく。
- b. 目を閉じてコンニチハ：グループ（10人以下）全員が室内に散らばって目を閉じて立つ。進行役が一人ひとり誘導し、別の人とのところに案内する。2人は目を閉じたまま手を使ってお互いが誰であるかを確かめる。触觉について再認識でき、視覚にたよらずに相手の新たな面を知ることができる。コミュニケーションは、頭や言葉だけでなく、他の感覚も重要な役割を果たしていることがわかる（＊初対面では難しいので互いに慣れてから）。(談)

**事例 7 :****未知との遭遇!?**

ねらい：「異文化」を感覚的に体験し、考える。

準備するもの：2室

展開：

- 1 2つのグループに分かれ、それぞれ別の部屋に入って指示を待つ。
- 2 片方のグループを文化A、もう一方を文化Bとし、次のように異なる指示を与える。
文化A スキンシップや言葉を多用する文化
文化B お辞儀などの形式を重んじる文化
「練習してみよう。おおげさなくらいにやっていいよ」
- 3 2つのグループが同じ部屋に集まる。
「異なる文化が出会いました。互いに自分の文化のやり方でいさつします」(約5分)
- 4 どのように感じたか話しあう（相手は何をしたか、それをどう感じたか、自分はどうだったか、など）。
例) 文化Aの意見…文化Bはバリアがあるよう、狭い世界でかわいそう、など。
文化Bの意見…文化Aはやたらとさわる、ぶしつけでずうずうしい、など。
- 5 相手のグループはどんな指示を受けたか考える。
- 6 どちらの文化が心地好かったか考える。
- 7 文化の特徴をどうとらえるかをみんなで考える。アメリカと日本を例にとると、例えばスキンシップなど、極端な違いに焦点があたることが多いが、共通の部分も多い。文化によって異なる部分と、人間にとて普遍的な部分について考えてみよう。

メディアを使った異文化理解 スーザン・サッカー

(横浜YMCAワールド・コミュニケーション・センター)

異文化間で発生する誤解や対立は、元を正すと、認識の仕方（見方・考え方）が原因であることが多い。しかし、自分の認識がどのように形成されてきたかに気づか

ない人は多い。問題が生じても原因がわからず、解決の糸口がつかめないでいるわけだ。

メディアは、ヒトの認識に大きな影響を及ぼしている。テレビの普及で影響力はますます強くなった。ニュースは事実を伝えるもの、ドラマや映画は娯楽のため、と私たちちは単純に考えがちだが、実際には、知らず知らずのうちに、様々な考え方や感情が植えつけられている。

認識形成を見直すため、私は映画を異文化理解学習に利用している。日本映画『バカヤロー』でアメリカ人が登場するシーン。アメリカ映画『クロコダイル・ダンディ2』で日本人が登場するシーン。どちらもわずか3分ほどだが、娯楽映画らしい誇張のしかたで「無遠慮で自己本位、声が大きくて太ったアメリカ人」「紺色の背広にメガネとカメラ、グループツアーの日本人」と、まさに固定観念そのままの姿が登場する。

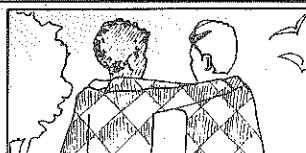
こうしたイメージに繰り返しさらされることで、私たちの潜在意識には影響が残るのではないか。日本人がアメリカ人に対して身構えたり、アメリカ人が初対面の日本人に「空手はできますか」と質問したりすることと、関係があるのではないか。

上のシーンは、異文化間コミュニケーションに初めて取り組む人にもわかりやすいという理由で選んだ。また、目で見てわかるということも、非常に重要なことを楽しい雰囲気で伝えられるということも、こうした学習にとっては不可欠な要素である。（編集部訳）

留意点 子どもから質問を受けたら

江村愛美 (Pacific Oaks College人間発達学修士)

人種や異文化について質問されたとき、無視する。話題を変える。あいまいな受け答えをするの3つは絶対に避けること。その子に「これは話題にしてはいけないのだ」という印象を与えてしまうからです。きちんと答えるのは難しい、この話はしたくない、と感じたら、それはなぜなのか、自分を見つめ直してください。無意識のうちに固定観念や否定的な考え方で縛られているかもしれません。教師自身の意識や理解が重要だということを忘れないでください。

**事例8：****話のない会話!?**

ねらい：言葉以外の行為がどんな意味や気持ちを伝達するかを考える。異文化間の普遍性、類似性、相違性について理解を深める。

準備：同人数の2つのグループ（3人以上）に分かれる

2グループが別々に動き回れる大きさの部屋

時間：1時間

展開：

- 1 〈全体〉「今日は、文化について（または、コミュニケーションについて）みんなで考えてみましょう」非言語コミュニケーション（言葉を使わない伝達）に関連していることは伏せておく。グループAとB（同数）に分かれ、グループごとに部屋の両端に集まる。
- 2 〈グループA〉に行き、指示を与える。「全員がグループBから1人ずつ選んで会話をします。○○について話してください（話題は、例えば、個人の職業に対する姿勢や女性の待遇の文化による違い、コミュニケーションに支障をきたす問題についてなど。但し、話題よりも次の指示の方が重要）。話をしている間は、必ず、相手に普段より10センチくらい近いところに立つようにしてください。それ以外の点は、話す速度など、すべていつもと同じにしてください」（非言語コミュニケーションについての指示は、これに限らないが、通常と明らかに異なるものを選ぶことが大切。例えば、相手の目を避ける、相手をじっと見つめる、相手の左肩越しを見つめる、相手の腕を繰り返し触る、内容にかかわらず笑みを絶やさない、顔の表情をまったく変えない、ウインクを繰り返す、絶えず指を鳴らす、相手の頭に手をやる、肩を軽く押す、など。）
- 3 〈グループB〉に行き、説明する。「今からAの人人が来て、皆さんと2人1組のペアをつくります。Aの人人が相手を選ぶので待っていてください。ペアごとに会話を始めてください」
- 4 〈全体〉ペアごとに、室内に適当に散らばって、固

くならずに会話を始める。（5～10分）

- 5 「まだお話の途中でしょうが、いったん止めて、A、Bに分かれて、もとの位置に戻ってください」
- 6 〈グループB〉に先に指示を与える。「Aの方を見ないで、順番に、自分のパートナーの外見について、例えば、めがねをかけているかどうか、髪があるかどうか、顔色は、どんな服装か、髪は長いか、など、できるだけ詳しく説明してください。」質問し合いながら、できるだけ細かく思い出すようにする。
- 7 次に、〈グループA〉にも、同じ指示を与える。が、3～4分後に、次の指示を与える。「先ほどのパートナーと、今度は△△（違う話題）について話をします。今度は、話をするときに相手の顔を見ないようにしてください、相手の顔以外なら何を見ていてもかまいません。その他の点はすべて普通にします」
- 9 〈全体〉「前と同じ人ともう一度ペアになって、今度は△△について話してください」（5～10分）
- 10 「話を止めて、全員集まってください」感想を数名に言ってもらう。「何か変な感じがしましたか？」できれば10分ほど話し合う。
- 11 Aにどんな指示を与えたか全員に伝え、非言語コミュニケーションの意味について簡単に解説する。
- 12 「非言語コミュニケーションの方法が人や文化によって異なるのに気がついたことはありませんか。みんなで例を考えてみましょう」
例) 相手との距離のとりかた、挨拶の仕方（握手、抱擁、キスなど）、感情表現の仕方、物の指差し方、手で数字を数えるやり方など。

出典：MULTICULTURAL EDUCATION: ACROSS CULTURAL TRAINING APPROACH, Margaret D. Pusch, Intercultural Press, Inc. 1979



異文化コミュニケーション研修参加報告記 樋口容視子（海外生活アドバイザー）

毎年ポートランド大学で行われるサマー・インスティチュート・フォア・インターナショナル・コミュニケーション（SIIC）は、異文化コミュニケーションに携わる人々にとってオアシスのようなものである。ここでは、この分野のトップレベルの専門家から直接、集中的に知識や体験を得ることができる。しかも多様な文化や背景をもつプロフェッショナルな人々とのネットワークの機会もたっぷりある。「とにかく楽しいんだから」という評判を聞いていたので、昨年、私はわくわくしながら参加した。やはり、期待通り楽しく成果の大きい夏期講座だった。

16日間3セッションの参加者は12カ国（アメリカは40州）から延べ約500人。期間中の講座数は21。講師は異文化コミュニケーション研究所の所長夫妻、ジャネットとミルトン・ベネット両博士、著書の邦訳もあるジョン・コンドン博士、ディーン・バーンランド博士、日本にもファンの多いシーラ・ラムジー博士などそうそうたる顔ぶれ。セッション（数日）ごとに一人の講師の集中講座を受ける。

「消化しきれないほどの材料が与えられるから、なるべくゆったり構えて」と初日に注意があった通り、集中講座の内容は濃く、刺激に満ちていた。第1セッションのみに参加のアメリカ人カウンセラーは、「ホットな頭を冷やさなくては」と上気した顔で帰っていったし、第3セッションまで受講した子ども劇のプロデューサーは、「頭の中がスクランブルエッグになった」と冗談を言った。

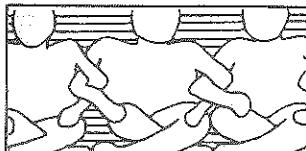
講座は朝9時から夕方5時半まで。夜は夜で異文化シミュレーションゲームやビデオ、ディスカッションなど盛りだくさんのプログラムだ。夜9時、10時によく学寮に戻るとホールにはワインとチーズの用意がしてある。食事時や休憩時間だけでは話し足りない人のために、ネットワーキングの場が作られているのである。疲れがたまっているなあと思いながらも、みんなついここで話

し込む。個人的な話、講座での話し合いの続き、情報交換などが、連日賑やかに行われる。相手の文化を知り、自分の文化を知らせたい。その欲求がとめどない好奇心と共にパワーとなってあふれているのである。帰国後私が海外の各地に宛てて書いた手紙は20通近くに上った。ガーナからの参加者は、後に私の仕事の上で協力してくれた。ルームメイトは、ほぼ毎月1回アメリカから国際電話をしてくる。日本からの参加者とも連絡をとりあっている。私の所属する異文化コミュニケーション研究会に入会してくれた人もいる。セミナー後、来日した人は、知っている限りで5人。ネットワークがどんどん広がっていくたしかな手ごたえを感じる。

ポートランドにいたのは、わずか10日間だったが、理論を学び、考える必要をいっそう感じた。そして、実践の場での感性を大切にする講師たちの意気込みから大きな影響を受けた。多様な人々が共生するグローバルな社会では、人間に対する共感という感性が、学校教育に携わる人にも、企業で活躍する人にとっても不可欠である。異文化に対する各人の許容性が問われていることをひしひしと感じた。センシティビティをいかに養成していくか。異文化理解のための教育の場でも、頭で理解することと心が納得することの差の大きさに愕然とすることがあるが、その橋渡しのできるリーダーたちを暖かく育てているのがこのサマー・インスティチュートである。

21の講座はそれぞれ魅力的だ。グローバル企業の異文化研修をテーマにしたものや、異文化カウンセリングなど心理学的なもの、日本人とのコミュニケーションやメキシコ人とのコミュニケーションといった個別研究などあり、実に多彩。続けて7年も受けにきている人がいるのもうなづける。

私は、7月18日から26日まで続けて2つのセッションをとった。最初は、カリフォルニア州立大学のスティラ・ティン・トミー博士の基礎理論。後半はアイオワ大学の留学生カウンセラー、ゲリー・アルセンの国際交流における異文化理解をテーマにしたワークショップだった。ステラ女史は香港出身で夫はアメリカ人で6歳の息子がいる。日本にも半年ほど研究に来ていたことがあり、異文化のまっただなかに身をおいているので、理論と実践



が一緒になって私たちの方に押し寄せてくる。頭がきれ、博学で、しかも柔軟な考え方の人だ。クラスは20名をわずか超えるくらいで、人数としては多すぎずちょうどよかった。その他にインターンと呼ばれる大学院生の助手が2名ついて、一緒に受講しながら、資料を配ったり、クラスの雑用をこなす。

第2セッションのゲリー・アルセンは、何千もの各国の留学生を相手にしてきた人だけあって、受講者一人ひとりに対するこまやかなケアが行き届いていた。セッションの始まる前に、講師のゲリーは食堂で私の胸の名札を確かめて挨拶にきた。これには驚いた。彼は知識を押し付けたり、強引な理論化はいっさいしなかった。「私は学者ではない」とはっきり言い、共に学び合っていこうという姿勢に貫かれていた。しかし、控え目でいながら、小気味よい現状分析が行われ、各人の出す意見をうまくまとめ、相手を傷つけずにきっちり方向づけや深い意味付けをしていく手腕は、やはり現場で場数を踏んできた人だけのことはあると思った。

ゲリーのこまやかさは、使う言葉にも現わっていた。彼は、日々外国人を相手にしているので、わかりやすい英語を話す事が習慣になっている。しかも、話の内容のレベルは落とさない。そのための一つの工夫は、外国人に難しいイディオムやスラングの多用を避けることだという。どうしても必要だったり、つい使ってしまった時に、後で説明を加え、別の言葉で置き換える。確かに、これなら、同国人同士でも意味の取り違いは起こりにくくなる。ゲリーは、コミュニケーションは、発信だけでは不十分であり、相手に受け止められてこそ成り立つ、という考え方を実践している人なのである。これは、実際には、なかなか実行は難しい。受講生のエリーンは、看護学の博士号を持つ教授で、大学で外国人看護婦の養成にあたっているのだが、ゲリーの話し方に対する姿勢にすっかり感銘を受け、今まで難しい表現で学生に接してきたことをおおいに反省していた。「英語がこんなにイディオムだらけだなんて、今までちっとも気がつかなかつたわ。これじゃ、外国人学生にわかりにくかったわけね」と言いながら、気をつけて話そうとするのだが、難しい表現が口をついて出るので、自分でも閉口していた。頭で理解することと、実行する事の間にはかなりの隔たりがあるのだ。

日本に帰ってから、私はゲリーの著書“AMERICAN WAYS”を読んで、改めて、彼の講座にも著書にも共通するものが「思いやり」であることを感じた。この本は、アメリカに住む外国人の役に立つようにと、アメリカの文化や生活をわかりやすく解説したものだが、単なる現象の説明に終わらず、外国人がアメリカ人の立場を納得して理解できるような書き方になっている。しかも、表現はいかにもゲリーらしくやさしい。自国について、このようにわかりやすく書くことは、実は最も難しいことの一つだろうと思う。それらが、ともに高いレベルに達していて、バランスのとれていることが、異文化同士の接触が絶えず行われる時代の国際社会において最も望まれることである。そのバランス感覚を楽しく総合的に学べる場が、ポートランドのサマー・インスティテュートである。この「オアシス」には何度も行きたい気がする。この次はどんな講座を受け、どんな人との出会いがあるかも楽しみである。

興味のある方は下記へお問い合わせください。

異文化コミュニケーション研究会

(SIETAR JAPAN)事務局

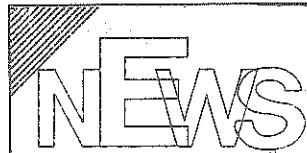
〒100 東京都千代田区永田町2-14-2

山王グランドビル

(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会内

TEL 03-3580-0286 FAX 3581-5608





情報コーナー

○こんなことしています

♪グローバル・アウェアネス

地球の現実を学び自分を高める教育実践を目指して、地域の外国人との交流、開発教育やN G Oを知る集い、ボランティアワークなどの活動中。事務局は教師、外国人、元青年海外協力隊員、主婦、会社経営者など多彩な顔ぶれ。参加希望の方は、葉書に自己紹介と参加希望と書いて下記にお送り下さい。老若男女問わず入会できます。

発信：川村千鶴子 TEL 03-5389-0744

グローバルエイジ研究所

〒161 東京都新宿区上落合1-1-15-1109

○わたしはこうおもいます

♪体験してわかった「わたしにもできる！」ニュースレターだけではできそうにないと感じていたのに、グローバル・セミナーを体験してみると「これはいける！」と思えるから不思議。どんどん研修会をして、この感触をいろいろな人に体験してもらうべきだと思います。中学3年の学活で「じゃがいも」「グローバル・ビンゴ」「写真を使って」などを実践してみました。

発信：古山 紀子

〒709-08

岡山県赤磐郡山陽町山陽団地4-6-29

○お知らせします

♪開発教育全国研究集会 8月22日～23日

「開発における女性の役割－視点をずらして見えてくるもの」をテーマに、開発教育の研究や実践事例、情報や経験を共有します。詳細は下記に。

会場：青年海外協力隊広尾訓練所

発信：大島芳雄 開発教育協議会事務局

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-61

TEL 03-3207-8085

○資料のご寄贈ありがとうございました

『世界の中の大坂』

『国際理解教育の設計と展開』以上、大阪府科学教育センター

『生活科の学習環境に関する調査研究レポート〔速報版〕』(財)中央教育研究所
『公開授業学習指導案、人間として生きる力を身につける国際理解教育』東京都青梅市立第4小学校

『開発教育の視点に立った高校地理の学習指導に関する研究』吉開 潔著

『国際理解教育 地球市民を育てる授業と構想』大津和子著 国土社

『国際理解と教育実践－アジア・内なる国際化・教室』坂井俊樹編著 エムティ出版

『高校で考えた外国人の人権』神奈川県立多摩高校日本語ボランティアサークル編 明石書店

『父娘で語る日米問題 若者にできること、大人がすべきこと。』加藤幸次・加藤美和著 大栄出版

『学校を開く 個性ある子ども育てるために』加藤幸次著 ぎょうせい

『クリスマスに咲いたひまわり』ウテ・クレーーマー作 小貫大輔訳

『Japanese Working for A Better World』以上、ほんの木

『環境教育ハンドブック 授業に生かせる環境教育実践事例集』全国小中学校環境教育研究会編著 日本教育新聞社

『フィリピンに学ぶ－体験学習の手引き』他2冊 雨宮 剛編著

『NIE－教育に新聞を』東京NIE推進委員会他編

『ガイドブックシリーズ 私は「新聞」です。』(社)日本新聞協会

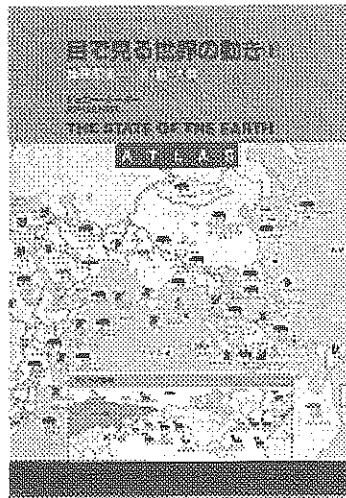
○眠っている未使用切手などを送っていただければ大歓迎です。(編集担当)

○今、ERICでは…

♪できました。ERIC翻訳教材第2弾！

『目で見る世界の動き①地球環境－水・緑・人間』

イギリスで生まれた斬新な地図帳。世界の現状を様々な角度から検証し直し、「地図」の色と形と面積を工夫することで、頭の中の世界を問い合わせようとする試みです。購入ご希望の方はハガキでERICにご注文ください。定価2,575円(+送料300円)



『PLT木と学ぼう活動事例集(幼～小6)』

本書のみの販売はいたしませんが、研修会と一緒に届けます。15名以上のグループでお申し込みください。

♪おかげさまで大盛況

グローバル・セミナー92は、環境教育をテーマに日本環境学会、東京YMCA、YMCAアジア青少年センター、YMCA横浜、ERICなどの主催で、6月14～28日、東京、大阪など16カ所で開かれ、のべ600人以上の参加をいただきました。各地の主催者の皆様にはいろいろとご尽力いただき、ほんとうにありがとうございました。

ERIC International ERIC NEWSLETTER No.12 July 1992
国際理解教育・資料情報センター

〒114 東京都北区田端1-21-18 津田ビル1F 電話=03-5685-1177

このNewsletterの印刷・編集費用の一部は大竹財団からの後援です。

リサイクルを考えて、印刷用紙に再生紙を使用しています。